

しゅう せん か にっ き 周旋家日記 ⑤ 乾明紀

祖母の死と浄土真宗との佛縁

昨年の2月からこのマガジンに執筆を開始し、最初の周旋として、妙心寺の塔頭である退蔵院の襖絵プロジェクトを紹介してきた。私にとって、この襖絵プロジェクトは仏教との再会であった。このプロジェクト以降、不思議なことに様々な佛縁に巡り合うことになったのである。

そのきっかけは、平成23年9月の祖母の他界だった。祖母は大正2年生まれであったので、97歳の大往生であった。祖母は、子が無かった曾祖父母の養女として迎えられた。曾祖父は、洋傘と和傘の卸業を創業していたが、子宝には恵まれず、血縁関係のあった祖母を養女にしたのだろう。その後、祖母は、丁稚奉公からのたたき上げであった祖父との縁談が決まり、家名だけでなく、家業も継いでいった。

祖母は、体が強い人ではなかったが、自分にも他人にも厳しく、他人の厄介になるのが嫌いな人であった。「葬式費用がもったいないから、死んだら傘の箱に入れて捨ててくれ」が口癖でもあった。その祖母も祖父を亡くしてからは、家族に甘えることができる人になった。孫である筆者は、祖母と一緒に四季の花を愛でに京都名所を散策したり、外食を楽しんだり、ときに家族で花合わせをして遊んだ。

その祖母が亡くなった。遺言どおりに傘の箱に入れて捨てるわけにもいかず、両親

と葬儀の準備をすることになった。父親はすでにリタイヤしているため、一応、経済力のある筆者にも発言権が生じた。しかし、喪主の経験が全くない筆者には、葬儀の段取りはまったくわからない。最近、「グリーフケア」と呼ばれる悲嘆回復のサポートが注目されているが、事故死でもなく、また大往生だったせいか、筆者は悲しみよりも、生から死に変化した祖母の体に必要な手続きを考えることが中心であったような気がする。ひょっとすると、手続きをすることで、祖母の死や喪失から逃れていたのかもしれない。

主治医や親戚へ一報を入れ、次に葬儀社の資料を収集した。当たり前であるが、葬儀も内容によってかかる費用がピンキリである。その後、父親が紹介を受けた葬儀社に来てもらい見積もりをしてもらった。ここでようやく葬儀から火葬場への段取りを知った。見積もりをお願いした葬儀社には、枕飾をしてもらい、祖母の体を安置してもらった。これにより、慌ただしかった空気が少し落ち着いた。時計の針は、すでに夜の10時を過ぎていた。そして、ふと思った。はて、お寺への連絡はどうしたものだろう…。そして、両親に聞いてみた。「お寺への連絡はいつするの？」

お正月、お盆、お彼岸にお墓参りは欠かさない家であったが、誰も菩提寺の住職に

会ったことがない。祖父の月命日には、月参り（月忌法要）をしてもらっていたが、それに来られるのは、役僧さんであったため、葬儀に向けたコミュニケーションの取り方がよくわからないのである。両親は「ほんとや、どうしたらいいと思う？」という回答だった。そして、「こんな夜分に連絡は失礼かな？」、「でも、知らせた方がいいんじゃない？」こんな会話を交わした後、勇気を出してお寺に電話した。しかし、電話はつながらなかった。

このときまで筆者らを癒していたのは、葬儀社であった。圧倒的な存在感である。それは情報の非対称性があるからであるが、「死者を送ること」に対する様々な知識を与えてくれるからであり、段取りに関する安心が癒しになった。そこに、宗教家は存在しなかった。我が国において、人が亡くなった直後というものは、恐らくこのようなケースが大半であろう。それが葬式仏教の批判につながっているのは容易に想像ができる。

死者を前にしているにも関わらず宗教家との距離がまったく近くならない時間が1時間ほど過ぎたとき、電話のベルがなった。出てみると菩提寺の住職である。会場で外出していたとのことで、息を切らしたかのような声で、恐縮しながらの電話であった。そして、「本来であれば、何を置いてもすぐに駆けつけ、枕経をあげさせていただかなければいけないところを、遅くなって本当に申し訳ない」という住職の言葉が胸に沁みた。筆者には、菩提寺からの折り返しの電話、そして、「何を置いてもすぐに駆けつける」という言葉が、義務的で形式的なセレモニーの準備ではない死者への弔いを感じ

じたからである。祖母は、亡くなったとはいえ、決して社会から忘れられた存在ではなく、丁重に弔われるべき、大切な存在であり、愛しい人であることを改めて気づかせてくれたのである。祖母を誇らしげに感じつつこの日はすでに深夜であったため、枕経は翌朝10時にしてもらうことで住職との電話を切った。

そして、住職が死者を弔いにやってくる朝を迎えた。先代の住職とは面識があったが、当代のことは誰も知らない。さらに、先代住職が厳しかったこともあり、少し緊張しつつ身支度をしていたら、予定の時刻より大幅に早く8時すぎに住職がやってきた！初めて会う住職は、180センチはあろうかと思う長身の大男だった。さらに驚いたことに長髪で、しかも、その量は多く、縮れ毛であり、後ろで括られてあった。さらに丸眼鏡で、口髭と顎鬚を生やし、まるでベトナム戦争に反対するヒッピーのようであった。実は、葬儀社より「変った人」というのは聞いていたが、僧侶のイメージとは対極とも言える容姿であり、見た目は、まさに「変った人」だった（笑）。容姿からは何かこだわりがあるのは明らかだったが、このときは、住職の思想信条はあまりわからなかった。筆者は勝手に既存の権力への反発があるのだろうと想像した。そんな勝手な想像をしつつ挨拶を交わした。長髪に髭面の住職は、笑顔がとっても優しい人であった。

やがて、住職は、おかみそりの儀式（帰敬式）をし、枕経をあげてくださった。おかみそりの儀式とは、剃髪の儀式を簡略化したものと言える。住職の説明によると、実際に髪を剃らないが、頭に剃刀を当てる

ことで剃髪とし、これによって三宝に帰依し、お釈迦様の弟子になったことを表すということだ。そして、弟子になったことを表す名前が、法名「釋（尼）〇〇」であるという。目の前で祖母は、お釈迦様の弟子になったのである。浄土真宗では、戒律を守り、厳しい修行をすることで悟りを開いて仏門に入ることを求めない。だから、戒名ではなく、法名になるのだそうだ。さらに、この儀式は、お釈迦様の弟子になるためのものであるから、生きている間に受けるのが本筋であるという。

この帰敬式と法名に関する考え方は、仏教の中における浄土真宗の個性の表れであるといえる。いわゆる「他力本願」に拠っているからだ。筆者は、住職の説明を聞きながら、人生において初めて、我が家の宗派が浄土真宗であることに自覚的になった。そして、他力本願に至った親鸞聖人の対人援助観に思いを馳せてみた。筆者の仮説はこうだ。

親鸞聖人のいた平安末期から鎌倉初期は、戦乱と天災、さらには、末法思想により、人々の不安は頂点をむかえた時代であった。聖人は、社会に翻弄され、社会的弱者となった人々、大切な人を失った人々に対して、あるいは苦悩する自分自身に対して、自力での悟りを無理強いすることの非対人援助性を見出したのではないだろうか。聖人は、自力で苦悩から逃れようとすればするほど、苦悩が頭から離れない人々の姿、自力で困難から抜け出せないことで自らを責めている人々の姿、あるいは、社会が自力を強要し、援助を受けられず見捨てられた人々の姿を目の前にし、他力という“優しさ”の必要性を感じたのではないかと想像した。

聖人は、苦悩する当事者に、阿弥陀仏の「すべてのひとを必ず救う」という願い（本願）があることを伝え、自力で苦悩に立ち向かうのではなく、他力本願に委ねることこそが大切だと説き、当事者の心理的柔軟性を回復しようとしたのではないかと筆者は考えた。なぜなら、人は、心理的柔軟性が低下するとネガティブ思考に陥りやすいからだ。このような状態では、自ら大切にしたい人生の価値にも気づきにくく、たとえ気づいていても行動できないものである。

また、心理的柔軟性を回復した後に、本人が望んで受ける帰敬式や法名は、お釈迦様の弟子として歩むという「価値」あるいは「コンテキスト」に自らの思考や行動がコミットメントすることへの強力な後押しとなったであろう。人生の指針に基づき行動を選択できる人は、感情をコントロールし、安寧に過ごすことも可能となるのだろう。

このように「他力本願」による心理的柔軟性の回復と三宝に帰依するという価値（お釈迦様の弟子として生きる）に基づく行動選択のススメこそ、筆者が浄土真宗の儀式に出会って感じた親鸞聖人の対人援助観の仮説である。

真宗門徒の家に生まれながらも、祖母が亡くなるまで浄土真宗のことは本当に知らなかった。この仮説も正しいかどうかかわからない。しかし、祖母の死と長髪のユニークな住職と知り合ったことを契機として、浄土真宗のことに少し興味が湧いてきた。後日、そんな筆者に、住職は思いがけない依頼をするのであった。（つづく）